

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs×島根大学

特集2

世界と未来のために、今取り組むべきこと 島根大学のSDGs

島根大学では、令和元年11月に「島根大学SDGs行動指針」を策定し、大学の経営戦略にSDGsの観点を取り入れ、地域や国際社会と一体となってSDGsの目標達成のために取り組んでいます。

Q.1 SDGsとはなんですか？

一言で言えば、「地球とそこに暮らす人間を含めた動植物が未来においても暮らしていけるために、人類として一人一人にできること」です。SDGsのよきな内容や取り組みは、これまででも、何らかの形で全ての人や地域、国が行ってきたものです。「未来」が地球と人類を含めた生態系にとって、生き生きと活動できる場所であり続けるために、2030年までに取り組むべき目標が定められた、ということなのです。

Q.2 SDGsが必要になった背景は？

世界には、環境的にも社会・経済的にもさまざまな解決すべき問題が山積しています。科学的な見地から、ただちに解決をはからないと、地球の環境が取り返しのつかない状態までに悪化し、人類の「現在の暮らし」が将来において維持できないことが予想されています。そこで、人類・世界が同じ目標を設定し、達成の期限を決めて取り組む必要が生じたのです。

Q.3 SDGsの目標とターゲットとは？

17個の大きな目標と、それらを達成するための具体的な内容や数値目標の169個のターゲットと呼ばれるものがあります。並び方には意味があり、1から6までの目標は、主に「人の生活に関わる」内容、7から12は「社会や経済に関わる」内容、そして13から17が「自然環境の保護と人の行動に関わる」内容となります。全ての人が、生活や仕事をするにあたって、必ずどれかの目標につながるよう工夫されています。

SDGs 17の目標(ゴール)



Q.4 どんな方法で貢献できますか？

個人で言えば、起きてから寝るまで、全ての行動・活動がSDGsの17の目標のどれかに関係しています。また、会社・企業であれば、業務内容そのものが、SDGsに直結しています。つまり、日常の全ての場面での行動が重要なのです。消費者にとっては、一人一人は小さな存在かもしれませんが、消費活動の中心が個人の担う部分が大きいとすると、一人一人の行動こそが、SDGs達成への鍵となるとも言えるでしょう。

島根大学のSDGs博士こと
松本一郎教授の
すぐわかるSDGs講座



PROFILE
松本一郎 教授(教育学研究科)
1991年島根大学大学院を修了、2001年より同職。SDGs/ESDを中心とした環境・防災/減災教育、理科教育を柱に、地球科学分野の専門研究を行う。島根県の環境総合計画(2021-2030)の策定に委員として参加したほか、山陰両県のSDGs啓発活動にも力を入れている。

SDGs×学生



SDGsの視点から 地域課題解消のアイデアを探る

9月12日に出雲市で、様々な問題に直面する島根県の未来を切り拓くための考え方やヒントについて学ぶ「地域未来づくり人材セミナー」が開催され、島根大学からは地域人材育成コースに所属する1年生5名が参加しました。
イベントでは、グループに分かれ、「THE SDGs アクションカードゲーム X (クロス) 出雲市版」を行いました。これは、出雲市の地域課題を調査し、出雲青年会議所が島根大学の学生、出雲市と共に協力して作成したカードゲーム教材で、参加者たちは、出雲市の地域課題をSDGsの視点から考え、課題解消のためのアイデアを出し合いました。

参加学生の声

SDGsをより身近に考えるきっかけに

近年よく耳にするSDGsについてもっと知り、身近に考えられるようになりたいと思い、このイベントに参加しました。このイベントで行われたSDGsカードゲームを通して、各々の課題に適した解決策があるだけではなく、同じ資源を使ったアプローチ法があったり、ある課題を解決すれば他方の課題も自ずと解決されたりと、課題を独立させて捉えるのではなく、総合的に俯瞰し、解決策を考えることの大切さを学ぶことができました。



医学部 医学科1年 門脇 彩里

SDGs×研究



子ども・若者の孤立・貧困問題への 文理融合アプローチ

数理・データサイエンス教育研究センターと法文学部・人間科学部の教員がチームとなって、学際的な共同研究体制を構築することで、子ども・若者の孤立・貧困に関する調査研究を行っています。また、子どものwell-beingと若者の地方への新しい人の流れをつくるため、大学の文理融合チームと自治体、地域の関係団体等による産官学連携プラットフォームの構築も目指しています。



法文学部 法経学科 宮本真子 教授

SDGs×研究



太陽光と水から水素エネルギーを造る 人工光合成で地球温暖化と脱炭素に挑む

脱炭素社会を実現し地球温暖化を防ぐためには、二酸化炭素を排出しないクリーンなエネルギー源として注目されている「水素」を、環境に対して低負荷かつ持続的に製造していく必要があります。私たちの研究グループは、植物の光合成を科学的に模倣した人工光合成と呼ばれる科学技術で、水と太陽光から水素を造る研究を推進しています。



総合理工学部 物質化学科 片岡祐介 助教